

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	「気」を使用した慣用句の意味と使い方
Author(s)	李, 尚勲
Citation	日本語・日本文化研修プログラム研修レポート集, 1999 : 40 - 47
Issue Date	2000-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00038918
Right	
Relation	



「気」を使用した慣用句の意味と使い方

い さんぶん
李 尚勲

1. はじめに

「気」という言葉はもともと中国から伝えられたもので、「気象」「気圧」「勇氣」などは今も日本、中国、韓国でよく使われている。

「気」という言葉を使用する中で、日本人は一字の「気」を利用して、「気にする」「気になる」「気に入る」など実にたくさんの生き生きした慣用句を生み出してきた。

中国の宋学によると、「理」が万有を支配する原理であるのに対して、万物を形成する元素を「気」という。「こころ」という語が精神活動を行う本体的なものを指すのに対して、「気」はその「こころ」の状態、反応など現実的な面をいう傾向が強い。」と述べられている。

日本語では、「気」の代わりに「心」を使っても意味が通じる慣用句がかなりあるが、「心」では置き換えられないものもあることがわかる。それは、日本語の「気」という言葉にいろいろな意味が含まれているからである。実に、外国人の中ではこのような慣用句が最も理解しにくい日本語の一つだと思う人もいるだろう。

それで、本論では「気」を使用した慣用句を中心にしているいろいろな「気」の意味をまとめてみることにする。

本論で「気」を使用した慣用句は10項に渡って分けられているが、あくまでも自分の立場から調査、検討を行った。

2. 「気」を使用した慣用句の意味と使い方

ア. 生まれつき持つて心への傾向、性質、性格を表す慣用句

(人間の内部的自然の様相や性質を言い表した表現。)

「気が大きい」—心がゆったりとしていて細かいことにこだわらない。度量が広い。

(例文): 彼は気が大きいので、そんなつまらないことに腹をたてない

「気が小さい」—つまらないことまで気を遣い、あれこれ心を労する。ささいなことを心配する。

(例文): 息子ときたら、体ばかり大きいくせに、至って気が小さい。

「気が強い」—性格やものの考え方が積極的ではっきりしている。ほかからの忠告や非難にも耳を傾けず、自分の意見や考えを曲げない。

(例文): あの人はおとなしそうに見えるが、あれでなかなか気が強いらしい。

「気が弱い」—性格や考え方が消極的である。自分の気持ちや考えをはっきり表すことができず、他人の言動に引きずられやすい。

(例文): そんなに気が弱くては、何もできない。もっと勇気を出せ。

- 「気が長い」—一人の性格が忍耐づよく寛大である性分だ。焦らずのんびりしている。
 (例文): 馬場さんは気が長いので、三十分くらい遅れても、たぶん待っているだろう。
- 「気が短い」—事の実現の遅れを待切れず、いらついたり催促したりする性質。忍耐づよくなく、すぐに怒ってしまう性格である。
 (例文): あんな気が短い人の下にいては、部下はたまったものではない。父は気が短くて、言ったことをすぐにしなければおさまらない。
- 「気が早い」—物事に落ち着いて取り組まず、先ばかり急ぐ。性急である。
 (例文): 『初優勝は七分通り決定』と喜ぶ気の早いファンも多い。
- 「気がいい」—性質がいい。気持ちが素直だ。性質が穏やかである。やさしい。性質がよくて、生動きがよい。
 (例文): 村山さんは気のいい人ですが、一回怒らせるとたいへんなことになるだろう。
- 「気が勝つ」 - 負けず嫌いである。強い気性を持っている。
 (例文): 妹のほうが姉よりも気が勝っている。
- 「気にそむ」—強くひかれる。望むどおりで満足する。
 (例文): あの仕事は彼にとって気にそまないものと思われる。

イ．物事に対していろいろと考える心、心配を表す慣用句

- 「気にする」—気がかりなこととして心配する。心配事などが心から離れない状態。
 (例文): 他人にどう思われるかなんて気にせずに、堂々としていればいいんだ。
- 「気にかかる」—心配事が心から離れない。心配になる。
 (例文): 息子さんの就職のことはずっと気にかかっていましたが、どうなりましたか？
- 「気になる」—心配である。〈～する気になる〉の形で〈～しようと思うようになる〉
 (例文): 試験の結果が気になって仕方がない。
 彼はやっとまじめに仕事をする気になったそうだ。
- 「気が揉める」—心配事があって、心が落ち着かない。
 物事が思うようにならず、もどかしくてイライラする。
 (例文): 子供の帰りが遅いので気がもめる。
- 「気を揉む」 - 心配で心が落ち着かないである。心配してやきもちする。
 (例文): こんなに遅くまで、どこへ行ってきたの。みんな気をもむじゃないの。
- 「気が気でない」—心配で落ち着かない。気がかりでたまらない。
 (例文): もし試験に不合格だったらどうしようと気が気でない。
- 「気にかける」—心にとめて忘れない。そのことについて忘れられずにいて、あれこれと心配する。あることにこだわってあれこれと心を悩ませる。
 (現に眼の前にある状態が注意を奪うことである。)
 (例文): 私のことをいつも気にかけていただき、誠にありがとうございます。
- 「気に病む」—物事の結果や将来のことをいろいろ心配する。くよくよ思い悩む。
 (例文): 彼女はちょっとした失敗をいつまでも気にやんでいる。

- 「気で気を病む」—その必要もないのに、心配しすぎて自ら苦しむ。
 (例文): 彼は別に異常もないのに、気で気を病んで病院に行った。
- 「気が重い」—何かをしようとしても気分が乗らない。憂鬱で積極的に取り組めない。
 (例文): 先生にあやまらなければならないと思うと気が重い。
- 「気が軽い」—気分的に負担がなくて楽なこと。打ち解けて気さくにふるまう。
 (例文): 明日は会社が休みなので、気が軽くなって酒を飲んでいる。
- 「気に留める」—心にかける。意識にのぼせる。注意する。
 (例文): 彼には何度も厳しく注意しているが、一向に着に留める様子がない。
- 「気が置けない」—気を遣ったり遠慮したりする必要がなく、気楽につき合える。
 (例文): 彼とは幼い頃から気の置けない間柄でいつも言いたいほうだいのことを言い合っている。
- 「気が置ける」—気づかいする。遠慮する気持ちがある。どことなく打ち解けられない。
 (例文): 彼にはなんとなく気が置けて十分に話せなかった。
- 「気を兼ねる」—相手がどう思うかということに常に気を遣って、自分の考えや気持ちを抑えて行動する。『気兼ねする』の形でよく使う。
 (例文): 山本君は気兼ねし過ぎて、自分の意見を人にちゃんと話さない。
- 「気が回る」—あれこれと細かなところにまでよく気がつく。余計なことにまで気を遣う。
 あれこれと推測する。
 (例文): まだ若いのに彼女は細かいところまでよく気が回る。
- 「気が差す」—普段なら意識せずにするものではあるが、自分の行動にやましいところがあるので、そのあとの様子が気になる。うしろめたい気持ちになる。
 (例文): いい加減に教えてしまったことが、今になって気が差して落ち着かない。
- 「気を張る」—失敗しないように気持ちを引き締める。意気こんで奮い立つ。
 (例文): 注意してのみを使えよ、気を張っていないと必ず怪我をするぞ。

ウ．物事に対して持つ配慮と注意、不注意を表す慣用句

- 「気を配る」—細かいところまで、いろいろと注意を払う。
 (当面のあれやこれやの事態にそれぞれ注意を向けることである。)
 (例文): 大会の成功は、君が随所に気を配ってくれたおかげだ。
- 「気が散る」—一つのことに注意が集中しない。いろいろなことに心がさまよう。
 (例文): 気が散って勉強になかなか集中できない。
- 「気をつける」—十分に注意する。注意力をはたらかせる。
 (例文): 火の元にはくれぐれも気をつけてください。
- 「気を許す」—(主に人に対して)警戒心を解いたり、緊張をゆるめたりする。
 (例文): あの男には、簡単に気を許したりしないほうがいい。
- 「気を遣う」—周囲の人や物事に対して、細かいところまでいろいろと心遣いをする。
 (例文): 会社勤めはあれこれと気を遣うことが多い。
- 「気を取られる」—他のものに引かれて、注意を奪われる。
 (例文): 話に気を取られて、鍋をかけていることを忘れてしまった。
- 「気を逸らす」—気持ちをわざと別の方向に向かわせる。注意や関心を他に向ける。

(例文): その問題に触れないようにうまく相手の気を逸らす。

「気を緩める」—緊張や警戒心を解く。

(例文): 大量得点をあげているからと、気を緩めたのが大逆転を喫する結果になった。

エ．物事に影響を受けて変わる感情、情緒を表す慣用句

「気が沈む」—憂鬱になる。塞いだ気分になってしまい、心が晴れない。

(例文): 彼は母がなくなって以来、ずっと気が沈んだままである。

「気が変わる」—気持ち別のことに移る。気分が一新する。

(例文): いきなり気が変わって途中から引き返した。

「気が滅入る」—気持ちが沈んで、憂鬱になる。

(例文): 最近、不幸続きで気が滅入る。

「気が咎める」—自分の落ち度がなんとなく気にかかる。うしろめたい気持ちになる。

(例文): 僕がなにげなく言った言葉が二人の仲をきまわずさせてしまって気がとがめているんだ。

「気がすむ」—満足して気分が安らかだ。気がかりだったことがなくなって気持ちがすっきりする。

(例文): 意見に相違があるようだから、君の気がすむまで話し合おう。

「気が立つ」—感情がたかぶって興奮する。

(例文): 口論しているうちに、ますます気が立ってきて、ついにあいてを殴り付けてしまった。

「気が引ける」—なんとなくうしろめたくて、遠慮したい気持ちになる。

(例文): 格調高い店なので、こんな服装で入るのは気がひける。

「気を腐らす」—物事が思うようにならず、暗い気持ちになったり、やる気をなくしたりする。

(例文): ゲームの負けがこんで、すっかりきをくさらす。

「気に障る」—不愉快にかんずる。しゃくにさわる。

(例文): お気にさわるような発言がありましたら、おゆるしてください。

「気を落とす」—物事がうまくいかずがっかりして元気をなくす。失望する。

(例文): 楽勝だと思っていた相手に負けて、選手たちはすっかり気を落としてしまった。

「気が詰まる」—(雰囲気などから) 圧迫されるような気持ちになる。窮屈さを感じる。憂鬱な気分になる。

(例文): 形式ばった席は彼にとってどうも気が詰まる。

「気を楽にする」—緊張を解いて、ゆったりとした気分になる。

(例文): 君、そう堅くならず、気を楽にして話さない。

「気を悪くする」—他人の行動に感情を傷つけられて、不愉快になる。

(例文): あまり君がからかうから、彼女は気を悪くして帰ってしまったじゃないかい。

「気が抜ける」—ふとしたことから、物事を積極的にしようとする気持ちが失せる。

(例文): 雨が降って野球試合が急に中止になって、気が抜けてしまった。

「気が晴れる」—心配事や悩み事などで暗く閉ざされていた心ははれはれとした感じになる。

不快な気分がなくなって心がさっぱりする。

(例文): 仲がよくなかった友達と仲直りできて、気が晴れた。

「気が弾む」—喜びやうれしさなどでうきうきした気分になる。

(例文): 天気のいい日は、朝からなんとなく気が弾んでいる。

「気は持ちよう」—物事のとらえ方によって、苦楽の感じ方が変わるものであるというこ

と。

(例文): 気は持ちようだ。そんな小さな失敗にくよくよせず、元気出したまえ。

「気を静める」—荒れていたり不安に揺れていたりする気持ちを落ち着かせる。

(例文): そういきり立たずに、気を静めて話を聞いてくれ。

「気を休める」—緊張や不安を取り除いて、気持ちを落ち着かせる。

(例文): 忙しい仕事が続き、このところ気を休める暇もない。

「気もそぞろ」—あることが気にかかって心が落ち着かず、そわそわしているさま。

(例文): 出身校が野球大会に初出場した日は、気もそぞろで仕事が手につかなかった。

オ．何かをしようと思う心の動き、意欲を表す慣用句

「気を取り直す」—物事がうまくいかずがっかりしていた状態から思い直して気持ちを引き立てる。

(例文): 受験に失敗してショックを受けたが、気を取り直して机に向かい始めた。

「気が進む」—積極的にやる気がする。その気になる。『気が進まない』の形でよく使う。

(例文): 誘ってみたが、気が進まない顔をしている。

あまり気がすすまなかったが、しぶしぶ引き受けた。

「気が乗る」—やる気がする。のり気になる。興味を持つ。

(例文): 彼は気が乗らないと、何度も言われても勉強しない。

「気を入れる」—やる気を出して物事に熱心に取り組む。

叱るなどして、やる気をおこさせる。気合いを入れる。

(例文): 気を入れて勉強しないで、だらだらやったのでは意味がない。

「気を吐く」—意気盛んなところを示す。威勢のいいことを言う。

(例文): みんなが意気消沈している中で、彼ひとり気を吐いている。

カ．外界を認識し、外界と自分との関係を理解する心の動き、意識を表す慣用句

「気を失う」—しようとする気がなくなる。意識をなくす。失神する。

(例文): あまりの痛みに、彼女は一瞬気を失ってしまった。

「気を確かに持つ」—取り乱したり、気を失ったりしないように意識をしっかりさせる。

(例文): たいした怪我ではないから、気を確かに持って。

「気が遠くなる」—意識がなくなる。正気を失ってしまう。

時間や数量などが膨大で、つかみどころがない感じがする

(例文): 僕の切手が百万円だと聞いて気が遠くなった。

キ．物事に引き付けられたり心を恋い慕ったりする心の動き、関心を表す慣用句

- 「気をそそる」—ある物事に対して、手に入れたい、してみたいという気持ちを起こらせる。
 (例文): 祭りばやしに気をそそられて、仕事をほうって出てきてしまった。
- 「気がある」—物事に関心を持っている。やろうという意志がある。
 (例文): その話には、実は大いに気があるんだ。
 彼は彼女に気があるらしい。
- 「気がない」—関心を持っていない。興味を感じない。するつもりがない。
 冷淡である。望んでいない。
 (例文): 二軍に落ちた監督の息子さんは、再び一軍にあがる気がないのかな。
- 「気が多い」—興味がいろいろと移りやすいこと。
 異性に対して移り気であれこれと関心の対象が変わる。
 (例文): 兄さん、また違った人とデートかい。少し気が多いんじゃないかい？
- 「気が向く」—してみようという気持ちになる。乗り気になる。関心を持つ。
 (例文): 君も気が向いたら、僕らのグループに参加してみないか。
- 「気を引く」—それとなく誘いをかけて、相手の気持ちを自分に引き付けようとする。
 また、相手の気持ちにそれとなく探りを入れる。
 (例文): さりげない素振りをしているけど、彼はあなたの気を引こうとしているのよ。
- 「気にいる」—好みにあってしたり望みどおりであったりして満足する。
 (例文): 一目見てその部屋が気に入った。
- 「気に食わない」—気に入らないところがあって、不愉快である。
 (例文): 気に食わないことがあるからといって、いちいち腹をたてていたら一年中怒っていなければならない。

ク．物事に対して有効に働く心、心遣いを表す慣用句

- 「気が利く」—よく心が行き届く。とっさに正しい判断ができる。
 (例文): 彼はまだ若いのにそんなことまで、よく気が利きますね。
- 「気を利かす」—状況を敏感にとらえ、その場に適した行動をとるように頭を働かせる。
 (例文): 二人にしてあげたいと、気を利かせてそっと座をはずした。
- 「気がつく」—注意が行き届く。よく配慮する。心に留めていなかったことに考えが及ぶ。(それまで意識に上がって来なかった対象が意識に上がってくることである。)
 (例文): 何も言わなくてもお茶が出せるとは、君はよく気がつきますね。
- 「気は心」—たとえ小さなことでも人のために尽くせば気がすむということ。
 また、自分の真心はわずかばかりのものに表されているということ。
 (例文): 本当に少しばかりのものです、気は心ともうします。どうかお受け取りください。

ケ．物事に対して持つ意志、考えを表す慣用句

- 「気が知れない」—相手の考えていることや行動が理解できない。
 (例文): 一流企業に就職したのに、すぐやめるとは、彼の気が知れない。

「気が済む」—満足して気分が休まる。気持ちがすっきりする。
気がかりだったことがなくなる。
(例文): 意見に相違があるようだから、君の気が済むまで話し合おう。

- コ．無形であるが生命力の根源とされるもの。気力、意気などを表す慣用句
- 「気を呑む」—「気」は「氣勢」「意気」の意味で相手を圧倒すること。
(例文): 気を呑んでかかれれば、たとえ相手が優勝候補だろうがそう簡単に負けはしない。
- 「気を呑まれる」—「気」は「氣勢」の意味で対決する相手に氣勢の上で圧倒される。
思っていなかった状況に出会って、あっけにとられる。
(例文): 相手のすさまじい剣幕に、すっかり気を呑まれる。
- 「気が腐る」—物事が思い通りにいかず、それ以上やろうとする気がなくなる。
行動や意志を他から阻まれていやになる。
(例文): 仕事が思うように進まないの、気が腐ってしまった。
- 「気が尽きる」—気力がなくなる。元気がなくなる。根気がなくなる。
(例文): 彼は昨晚飲み過ぎたせいか、朝から気尽きているようだ。

3．結果の考察

- 「気」を使用した慣用句は190用例以上あるが、本論では82用例を選んで調査した。まず、格項の分析結果をまとめてみると、
- ア．生まれつき持っている心の傾向、性質、性格を表す慣用句
- 「気が大きい」と「気が小さい」、「気が強い」と「気が弱い」、「気が長い」と「気が短い」などの形容詞慣用句の対義語句が目立つ。特に、対義語の形容詞によって慣用句全体の意味も対義関係になるものが見られる。ところが、「気が早い」には「気が遅い」のような対義語が見られない。「気が長い」は「あんまりゆっくり構え過ぎていて周囲の人をいら立たせる。」という意味もあったが、時の経過とともに意味がくずれて現在は、「気の長い話」という形でよく使う。
「気が勝つ」と「気にそむ」という慣用句は現在あまり使われていない。
- イ．物事に対していろいろと考える心、心配を表す慣用句
- 「気で気を病む」という表現は「気で気を遣う」、「気で気を揉む」と同義である。
「気が軽い」という場合は「気軽い」、「気軽に」の形でよく用いられる。
- エ．物事に影響を受けて変わる感情、情緒を表す慣用句
- 「気が咎める」という場合は感情と言っても特殊な場合で、「良心が咎める」ということを意味する。
「気に障る」で「お気に障る」と「お」をつけると、相手に許しを乞う表現となる。
「気が詰まる」という慣用句は「一心になる」という意味の「気を詰める」と混同して使用されている場合もある。
「気が抜ける」という場合は飲み物などの独特の風味や香りなどがおちるという意味もある。
(例文): このビール、すっかり気が抜けているぞ。
「気は持ちよう」という場合は、ある事態と自分の間に拡がっている気を自分が公有

する仕方によって同じ事態でも自分にとっての意味あいが変わってくることを意味している。

慣用句よりことわざとして扱われている。

オ．何かをしようと思う心の動き、意欲を表す慣用句

「気を取り直す」は「気を引き立てる」の意味と似ている。

「気が進む」と「気が乗る」は「気が進まない」と「気が乗らない」の形でよく使われる。

キ．物事に引き付けられたり心を恋い慕ったりする心の動き、関心を表す慣用句

「気に入る」と「気に食わない」の場合はア項に近いという見方もあるが、私は心の動きを表す意味が強いと考えてキ項に入れた。

ク．物事に対して有効に働く心、心遣いを表す慣用句

「気が利く」という場合は新しい人や目下の人について使い、同等あるいは目上の人について面とむかって使うのは失礼に当たる。

ケ．物事に対して持つ意志、考えを表す慣用句

「気が知れない」は批判的な意味あいを込めて使うことが多い。

中国のある学者は「気」はもともと空気のことであり、森羅万象の根源としての空気を意味していた。それが呼吸によって人体に入り、人間の生活力の根源ともなり、そこからさらに、魂や心の動きの意味に転じていったものであろう。ここから気の姿を意味する「気象」の語が天地自然の意にも個人の気性の意にも用いられることになる。」と述べられている。つまり、「気」は自分のものとして言われながら、自分の自由にならぬもの、周囲の情勢次第でいろいろに変化するものであると言われている。そこで、今までの「気」に関するいろいろの先行研究を見ると、学者によってさまざまな意味と使い方が出ていることが分かった。

この研究では、「気」を使用した慣用句の意味把握が中心となっているので、それ意外のさまざまな「気」の意味と使い方は今後、より深く進めて行きたい。

参考文献・参考資料

- 宮地 裕 『慣用句の意味と用法』明治書院（1972）
木村 敏 『人と人の間—精神病理学的日本論』弘文堂（1972）
土肥直道 『からだ語辞典』騒人社（1996）
尾上兼映 『成語林—慣用句』旺文社（1992）
松村 明 『大辞林』三省堂（1995）
戸田利彦 『日本語教育のための語彙の基礎的研究—気の慣用句意味、用法を中心に』（1991）